

「わたしを束ねないで」要点を解説 (期末テスト対策ポイント)

「わたしを束ねないで」基本情報

「わたしを束ねないで」基本情報

作者:新川和江(しんかわかずえ)

詩の形式:口語自由詩(こうごじゆうし)

構成:5 連から成っている

使われている表現技法:比喻(直喩・隠喩)・体言止め・擬人法・反復法

詩の主題:枠にはめられたり束縛(そくばく)されることなく、自分の可能性に向かって自由でいたいという思い

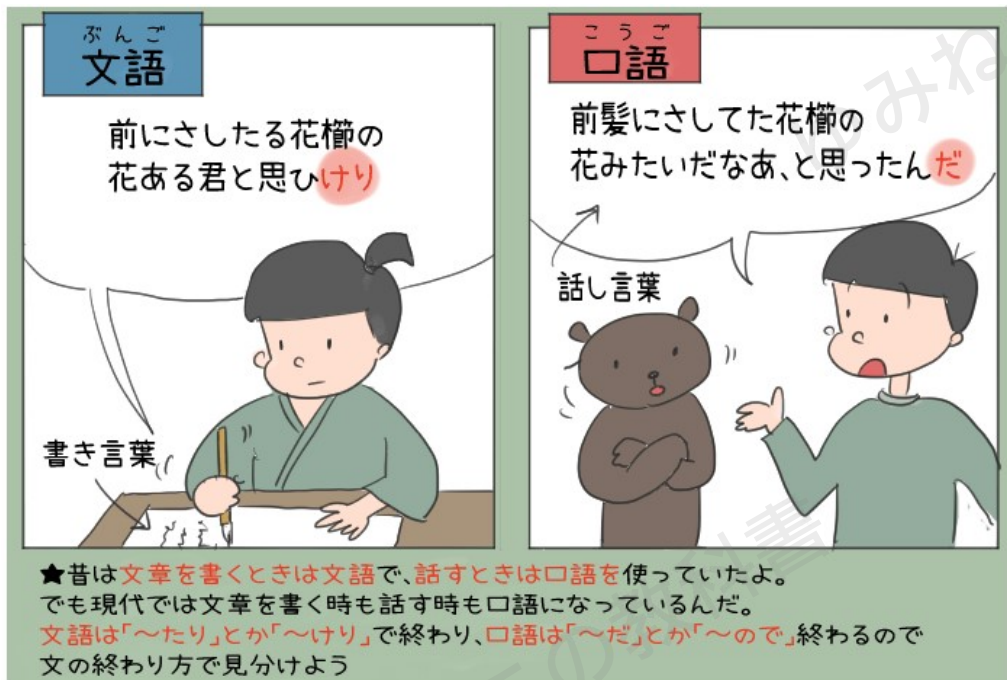
「わたしを束ねないで」テスト対策ポイント①

詩の形式と構成について

詩の形式は「口語自由詩」

「わたしを束ねないで」の詩の形式は「口語自由詩(こうごじゆうし)」。「口語」というのは、今の日本で普通に使われている話しことばのこと。★口語に対して、「昔の書きことば」のことを「文語(ぶんご)」というよ。





「自由詩」とは、文字通り「自由に」思いつくままに言葉を並べて作った詩ということ。

「わたしを束ねないで」のそれぞれの連の文字数に、とくに決まりはないよね。

★自由詩に対して、「5・7・5」というように型が決まって作られている詩を「定型詩(ていけいし)」というよ。

「口語」で書かれた「自由な詩」だから、「口語自由詩」なんだね。

この「口語自由詩」についてはテストでも良く出るので、絶対に覚えておこう。

5つの連から作られている

「連(れん)」というのは、「大きなまとまり」で分けたもののこと。

物語の場合の「段落」と同じイメージだよ。

詩の場合は、連と連のあいだが1行空けられていることが多いよ。

「わたしを束ねないで」は、大きな5つのまとまりで分けることができるね。

「わたしを束ねないで」の構成

第一連:「わたしを束ねないで」

第二連:「わたしを止めないで」

第三連:「わたしを注がないで」

第四連:「わたしを名付けないで」

第五連:「わたしを区切らないで」



「わたしを束ねないで」テスト対策ポイント② 使われている表現技法について

「わたしを束ねないで」の詩には、いくつかの表現技法が使われているよ。
表現技法は、印象を強くしたり、リズムを良くしたりして工夫する表現の方法のことだったね。

1. 比喩（直喩・隠喩）

比喩とは、あるものを他のものに喩（たと）える表現技法のこと。
例えば、「わたしを束ねないで」では、人間である「わたし」を、「稲穂」や「海」などいろいろなものに喩えているよね。

この比喩は、さらに「どうやって喩えられているか」で「直喩」と「隠喩」に分けられるんだ。

直喩（ちよくゆ）とは

「～ように」とか「～みたいに」などの言葉を使って、直接明らかに比喩していることが分かる喩える方法のこと。

直接喩えるから、「直喩」だね。

つまり、「いかにも例えていることが分かるやり方」というイメージ

隠喩（いんゆ）とは

直喩に対して隠喩は、比喩であることを直接明らかにしないで、喩えるものと喩えられるものを「〇〇は××」というように、結びつけて表す方法のこと。

つまり、「比喩であることがパッと見は隠されている」というイメージ。

比喩が隠されているから、「隠喩」だね。

「わたしを束ねないで」で使われている直喩の例

「あらせいとうの花のように」

「標本箱の昆虫のように」

「高原からきた絵葉書のように」

「日常性に薄められた牛乳のように」

「ぬるい酒のように」

「、や、いくつかの段落そしておしまい」「さようなら」があったりする手紙のように」



どれも「～ように」という言葉が使われていて、比喩であることが直接明らかにされているよね。

「わたしを束ねないで」で使われている隠喩の例

「わたしは稲穂」

「わたしは羽撃き」

「わたしは海」

「わたしは風」

「わたしは終りのない文章」

どれも「～ように」とか「～みたいに」という言葉を使うことなく、喩えるものと喩えられるものが直接結びつけられて書かれているよね。

2. 擬人法

擬人法とは

人間以外のものを人間のようにたとえることで、生き生きとさせて印象を強く与える効果がある表現技法のこと。

第一連の5行目には、「大地が胸を焦がす」という表現があるね。

本当なら、大地は人間（生き物）ではないから「胸を焦がす」なんてことはしないよね。
大地を人間（生き物）にたとえて、「胸を焦がす」という書き方をすることで、詩が生き生きとして印象に残るようにしているんだよ。

3. 体言止め

体言止めとは

文章の最後を名詞で終わらせる表現技法。
リズム感が出て、印象を強める効果があるんだ。

「わたしは稲穂」（名詞である稲穂で文章が終わっている）

「目には見えないつばさの音」（名詞である音で文章が終わっている）



このように、「わたしを束ねないで」のいくつかの文章は終わりが名詞で終わる「体言止め」が使われているよ。

こうして、詩にリズム感を持たせて、印象が残るようにしているんだね。

④反復法

反復法とは

同じ言葉を何度も繰り返してリズム感をもたせる表現技法。

「わたしを束ねないで」のそれぞれの連は、なんだか似ているよね。
なぜなら、

「わたしを〇〇ないで」

「△△のように」

「××ないでください」

「わたしは□□」

という同じ言葉や表現が繰り返して使われているからなんだ。

こうすることで、一定のリズム感が生まれて、詩が生き生きしてくるし、読み手の印象にも強く残るようになるよね。

「わたしを束ねないで」テスト対策ポイント③

作者の伝えたいことについて

「わたしを束ねないで」の5つの連に出てくる、

「わたしを〇〇ないで」という部分の〇〇には、「束ねる」「止める」「注ぐ」「名付ける」「区切る」という言葉が使われているね。

この言葉に共通するイメージは、「制限される」とか、「束縛される」「枠にはめられる」という不自由なイメージだね。

それに対して、「わたしは□□」という部分の□□には、「稲穂」「羽撃き」「海」「風」「終わりのない文章」という言葉が使われている。

これらの言葉からは、「広大」とか「エネルギーがあふれる」とか「動き続ける」という自由なイメージが感じられるね。



つまり作者が伝えたいのは、「不自由にしないで、わたしは自由だ」ということ。

作者の伝えたいこと

「枠にはめられたり束縛されることなく、自分の可能性に向かって自由でいたいという思い」

「わたしを束ねないで」テスト対策ポイントまとめ

まとめ

- 作者は新川和江
- 詩の形式は「口語自由詩」
- 直喩・隠喩・体言止め・擬人法・反復法が使われている
- 作者の伝えたいことは「枠にはめられたり束縛されることなく、自分の可能性に向かって自由でいたいという思い」

